

ロシア人の観た明治の新潟

— P.G. ヴァスケーヴィチ 『日本旅行日誌 敦賀港から新潟港まで』 について —

沢田和彦

パーヴェル・ゲオルギエヴィチ (またはユーリエヴィチ)・ヴァスケーヴィチは 1876 年 12 月 28 日¹ にロシアのヴォルニニ県ザスラフスキ郡ペリョーフ村 (現ウクライナ共和国) に生まれた。父は聖職者で、兄弟、姉妹は 4 人いた。東洋学院が創立されると、その中国語・日本語科第一期生になった。²

1. 東洋学院

東洋学院は、日本、中国、モンゴル、朝鮮の言語と事情の教育、研究を目的とする 4 年制専門学校として、1899 年 11 月 2 日にウラヂヴォストークに開校された。学生は 2 年次への進学時に、中国語・日本語、中国語・朝鮮語、中国語・モンゴル語、中国語・満州語の 4 コースのいずれかに振り分けられた。中国語は全学年・全コースに共通する必修科目で、これに加えてコース別に 2 学年から専攻外国語が必修になった。日本語の授業が始まったのは、第一期生が 2 年次に進級した 1900-1901 学年度からで、担当は、1898 年にペテルブルグ大学東洋学部を卒業した E. スパルヴィン教授と、彼が 1900 年の日本留学中にスカウトした前田清次講師³の二人である。

第一期入学生は 23 人、他に 8 人の聴講生 (うち将校 4 人) を加えて全部で 31 人である。そのうち 2 年次に進級できたのは 18 人、うち中国語・日本語科は 6 人だった。⁴ 翌 1901 年 5 月 10 日の教授会議事録によると、前月に行われた進級試験の結果、3 年次への進級が認められた第一期生は、聴講生を除けば全部で 9 人で、そのうち中国語・日本語科はヴァスケーヴィチと A. コーベレフの 2 人。ヴァスケーヴィチの成績は、中国語が 3 (5 段階評価で 3 以上が合格)、国際法が 5、専攻外国語が 5、英語が 4、歴史が 4 で、5 科目合計 25 点満点で計 21 点。中国語・日本語科の落第が目立つのは、日本語の授業がハードだったためだろう。東洋学院には夏期休暇中に学生を研究対象国に派遣する制度があったが、この試験の結果、官費で中国、日本、朝鮮へ派遣される 6 人の学生が決まり、日本へはヴァスケーヴィチとコーベレフが派遣されることとなった。⁵ ヴァスケーヴィチは神戸、大阪、横浜、東

京など太平洋側の都市部を廻った。⁶ 学生は各自単身の旅行を経験して、その成果を『東洋学院紀要』に発表した。⁷

翌 1902 年 5 月 14 日の教授会議事録によると、4 月に行われた進級試験の結果、4 年生への進級が認められた第一期生は全部で 5 人で、そのうち中国語・日本語科はヴァスケーヴィチのみである。彼の成績は、中国語が 3、専攻外国語が 4、歴史が 4、商法が 3、簿記が 4、英語が 3 で、6 科目合計 30 点満点の 21 点。この結果、研修旅行として 12 人、うち日本へはヴァスケーヴィチを含む 4 人の派遣が決まった。⁸ ヴァスケーヴィチのこの折りの旅行報告が、『日本旅行日誌 敦賀港から新潟港まで』である。

2. 旅行の背景

1. **旅行費用** 旅行費用は東洋学院から出た。ヴァスケーヴィチには 4 カ月分 350 ルーブリが支給されたが、これはこの年の各派遣学生への補助金のうち最高額である。(52, 54)⁹ 当時の換算レートは 1 円が 96 から 97 コペイカで、両替は敦賀市の大和田銀行で 1 ルーブリにつき 5-7 銭の手料を払ってできた。(365, 386, 582) これとは別にヴァスケーヴィチは金沢でロシアの知人からの為替送金 100 ルーブリを受け取っている。(371-372)

2. **対岸航路の開設** 1902 年 2 月、通信省は大阪の大家汽船に命じて交通丸と凱旋丸をそれぞれ日本海の甲乙 2 航路に就航させた。4 年間の期限付きで、毎年の補助金は 14000 円である。甲は門司を起点とし、浜田、境、宮津に寄港して、敦賀からウラヂヴォストークを往復、さらに七尾 (石川県)、伏木、夷 (佐渡)、新潟、函館、小樽に寄港、南サハリンのコルサコフ、ウラヂヴォストーク、元山、釜山と反時計回りで門司に帰る。乙は小樽を起点とし、甲と同じ寄港地を一周するが、時計回りである点と、七尾からウラヂヴォストークを往復する点が甲と異なっていた。運行回数は甲が年 12 回、乙が年 4 回だった。敦賀、七尾ともにウラヂヴォストークまで 2 昼夜の航海で、ともに片道一等 24 円、二等 14 円、三等 7 円である。運行回数

少ない乙航路はすぐに廃れた。¹⁰

航路開設の結果、北陸地方は対岸交易の希望に湧いていた。従ってヴァスケーヴィチは、対岸から北陸地方にやって来た最初のロシア人、しかも日本語を解するロシア人として、各地で歓迎を受け、質問責めに会った。しかし、北陸の商工業者にとって事は甘くはなかった。ウラヂヴォストーク港で前年1月から輸入外国製品に対して高率の関税が課され始めたのである。¹¹ おまけにかの地では、既に杉浦商店や徳永商店のような大資本の日本の商店が存在していて、北陸地方の零細な商工業者が割って入るすきがなかったのである。従ってヴァスケーヴィチの反応はきわめて冷徹だ。その考えによれば、ロシアと広範な交易を行うとすれば、その対象はモスクワ、ペテルブルグ、オデッサのような大都市であるべきだという。(103, 302) 彼はロシア語の知識も必要条件として挙げている。(301)

3. ヴァスケーヴィチの日本語の語学力 ヴァスケーヴィチの日本語の語学力は、学習期間2年としてはかなり高いレベルにあったと考えて間違いない。彼の読解能力は、各地で日本語の旅行案内や統計資料などをフルに活用していることからして、十分にあったようだ。また聞き取りと会話の能力に関しても、日本人との会話に不自由はしていない。ヴァスケーヴィチは敦賀と金沢で観劇の機会があり、福井市で地方裁判所の審理を見学し、また伏木市では寺院で僧侶の説教を聞いたが、いずれの場合もその内容をほぼ完全に把握している。(85-86, 106, 226, 409)

3. 新潟市到着まで

1. 旅行の日程とルート ヴァスケーヴィチがウラヂヴォストークを出発したのは5月19日、帰着したのは9月1日で、3カ月半の旅行である。ルートは次のとおり。

ウラヂヴォストーク、敦賀市とその周辺部、福井市、三国市、山代温泉(以上、福井県)、山中温泉、那谷村、粟津温泉、小松市、金沢市、七尾港、和倉温泉(以上、石川県)、伏木市、高岡市、富山市(以上、富山県)、直江津港、新潟市、新津市(以上、新潟県)、伏木市、金沢市、敦賀市、ウラヂヴォストーク

このうちポイントがおかれていたのは敦賀市で、ヴァスケーヴィチの滞在は3週間、旅行記では80頁を占める。ウラヂヴォストークと直接に結ばれた町の調査として当然のことだろう。だが彼が予想以上の成

果を上げることができたのは金沢市で、その部分が旅行記全体のクライマックスをなしている。結局金沢での滞在は2週間、旅行記の記述は160頁以上となっている。

2. 二葉亭四迷と戸水寛人のこと ヴァスケーヴィチは来日時に二葉亭四迷とすれ違った。二葉亭は5月14日、ヴァスケーヴィチ出発の5日前に同じ交通丸でウラヂヴォストークに到着した。周知のように二葉亭は東京外国語学校露語科主任教授の地位を投げ捨て、徳永商店のハルビン支店で顧問として働くべく大陸に渡ったのである。ヴァスケーヴィチは自分の師スパルヴィンから間違いなく二葉亭のことは聞いていたはずで、敬意を込めてその名を紹介している。(92-93, 135) 二葉亭はウラヂヴォストーク到着4日後にスパルヴィン宅を訪問したが¹²、ヴァスケーヴィチが旅行出発直前に二葉亭と会ったかどうかは不明である。

またヴァスケーヴィチは帰路で戸水寛人と同じ船になった。この人物は1894年に東京帝国大学法科大学教授に任ぜられ、ローマ法の権威と称せられた。彼は熱烈な国家主義者で、この翌1903年に大学の同僚と7人で対露強硬外交、即時開戦論を唱え、政府に意見書を提出した。戸水はこの時3カ月にわたるロシア沿海州、満州、朝鮮への旅に出かけるところだった。¹³ 彼はウラヂヴォストークの税関検査の際、ロシアの役人が自分の書籍を没収しないよう助けてほしいとヴァスケーヴィチに頼んで、根も葉もないことだと後者を憤慨させている。(580)

3. 大津事件の人力車夫の訪問 山代温泉でヴァスケーヴィチは、1890年の大津事件の時の人力車夫北賀市市太郎の訪問を受けた。事件の折り、もう一人の車夫が犯人津田三蔵の脚にタックルして倒し、津田が取り落としたサーベルを北賀市が拾い上げて、津田に二太刀浴びせたのである。ニコライ皇太子離日の直前に北賀市は日本の貴顕とともにロシア艦にディナーに招かれ、ニコライと盃を交わす榮譽に浴した。ニコライは感謝のしるしに二人の車夫にそれぞれ一時金2500円を下賜し、さらに終身年金として年1000円を送ることを約した。¹⁴ その後郷里の石川県江沼郡に帰っていた北賀市は、ロシアの青年に助力を申し出るべく訪ねてきたのである。(187-188)

4. 北陸地方のロシア語教育 ヴァスケーヴィチ訪問の前年から、金沢商業学校では既にロシア語を教えていた。教員は「グンジ」という人物で、東京のニコライ神学校で学び、セルゲイ・グレーボフ神父と懇意の間柄だったという。グンジは金沢の陸軍第九師団司令部でもロシア語を教えていた。(300, 301, 318,

345) この「グンジ」なる人物は、恐らく軍司義男のことだろう。軍司は1897-1902年にニコライ女子神学校の雑誌『裏錦』に「日約烈女伝」などを連載し、1906年にはロシア人革命家 N.ラッセルらが長崎で発行していた露字新聞『ヴォーリャ』(自由)の準社員として、日本の社会主義者の機関紙『光』の記事を数回ロシア語に訳して掲載した。恐らく日露戦争中は金沢のロシア人俘虜収容所の通訳をしていたのだろう。その時にラッセルと知り合い、彼の考えに共鳴して協力するに至ったのではないか。第二次世界大戦前の死の直前まで、軍司は長く南満州鉄道のハルビン事務所に勤務した。¹⁵

ヴァスケーヴィチが帰途敦賀に立ち寄った時には、この地にも夜間学級のためのロシア語教員が招聘されていた。名前は不明だが、東京外語を卒業した後ウラヂヴォストークでロシア語を学んだ人物である。(580) また七尾・ウラヂヴォストーク間の航路開設とともに、対露貿易の進展を計るため1902年初頭金沢に「東亜貿易同盟会」という組織が作られた。(256)¹⁶

4. 新潟市訪問

ヴァスケーヴィチの新潟市滞在は8月18日夜から27日朝までの実質8日間で、旅行記では50頁弱を占める。

1. ヴァスケーヴィチが訪問した施設・場所、面会した人物、言及した人物 まず冒頭の場面。

「新潟市に私は夜9時頃に到着した。一番いいと勧められた旅館『ヨシネ』まで駅から人力車でほぼ半時間かかった。日本最大の川の一つと目されている信濃川の橋を渡らなければならなかった。比較的早い時間帯にもかかわらず、町には何ひとつ動きがなかった。私が通行しなければならなかったいくつかのメインストリートですら、死のような静寂が支配していた。旅館はもう閉まっていて、寝ぼけまなこの女中たちが私を出迎えた。私にあてがわれたのは、ぱっとしない、汚い部屋だった。」(531)

新潟市の第一印象はあまり良くなかったようだ。ヴァスケーヴィチが到着した駅は、信濃川河口右岸にある沼垂駅で、この時新潟市内までまだ鉄道が延びていなかった。新潟駅が誕生するのはこの2年後のことである。¹⁷「比較的早い時間帯にもかかわらず…死のような静寂が支配していた。」とあるが、新潟の人々にとって夜の9時は決して「比較的早い時間帯」ではなかっただろう。彼が宿泊した旅館は、正しくは「吉

勘」である。¹⁸ 当時新潟市内に旅館は80軒余りあったが、そのなかで「吉勘」はベストスリー前後に位置しており、新潟県庁関係者の定宿になっていた。¹⁹ ヴァスケーヴィチが部屋の文句を言っているのは、これ以前の各地で必ず一番いい旅館に宿泊して、目が肥えていたからである。

翌日ヴァスケーヴィチが活動を始めるにあたって最初にしたのは、日ひ和より山やまの櫓うしに上って新潟の町を概観したことである。(532) 日ひ和より山やまはその名のとおり江戸時代には日和の変化や船の出入りを見張るのが目的だったが、後には観光の展望用として使われた。1880年の大火の翌年にやや海寄りの砂丘に「新日ひ和より山やま」がつくられ、新しい櫓と茶店が建てられた。ヴァスケーヴィチが上ったのはこちらの方である。²⁰

新潟の町の印象は、清潔感を欠くというものだった。

「概して町の印象はかなり良いものだった。より子細に町を見学しても同じような印象を受けるだろう、とは言わない。町のあちこちに沢山の堀がめぐらされているにもかかわらず、町は清潔さを誇ることはできない。昔、新潟市がまだ村だった頃、70にも上る橋の数の多さで有名だった。現在はその数は193に上り、同時にそれに応じて掘割の数も増えた。しかし、残念ながら、その大部分はほとんど流れない水、しかも汚れた水が一杯たまっている。そのせいで掘割はバクテリアと不快な悪臭の源となっている。それは町の中心部でとりわけ顕著だ。きれいな自然な色をした水をたたえた堀を、私はひとつとして見る機会はなかった。至るところで同じように黒い、ほとんど腐ったような密な塊が見られた。信濃川の水も濁った暗褐色だった。」(532-533)

防火、交通、物流の動脈として、新潟町に堀が掘られたのは1655(明暦元)年のことである。そして1713(正徳3)年に堀の両側に柳を植えた。「大部分はほとんど流れない、しかも汚れた水が一杯たまっている」とあるのは、恐らく地盤沈下で通水が悪くなっていたためだろう。昭和20年代から埋め立てが始まり、1964年の新潟国体までにすべての堀が埋められた。²¹

「『万代橋』という名で知られる橋の長さは430間[約783メートル]である。この橋は1886年にヤギ・トモナガ[八木朋直]氏の私財によって建設され、費用は24万7800円かかった。政府はこの実業家に、通行人から1銭ずつ、人力車からは3銭ずつ徴収することを許可した。1901年に県庁はヤギ・トモナガ氏と合意に達して、15万円で彼から橋を買い上げ、数年間で分割払いにすることとした。」(533)

ヴァスケーヴィチが渡った初代万代橋は、長さ781.8メートル、幅6.4メートルの木橋で、総工費は3万800円。彼も書いているように、通行人から1銭ずつ徴収したが、橋銭の収入は日に3-4円(300-400人)にすぎなかった。1900年に新潟県に1万5000円で買収されて無料橋となったが、1908年の大火で焼失。現在の万代橋は1929年竣工の3代目である。²² 八木朋直(1841-1929)は第四国立銀行頭取、新潟市会議員、県会議員、新潟商業会議所顧問などを歴任した人物で、ヴァスケーヴィチ来訪時には第4代新潟市長をつとめていた。²³

1902年8月20日の地元紙『東北日報』の記事「東洋語学院大学生」によると、ヴァスケーヴィチが新潟随一の商店街である古町通りの仁木茂平の漆器店を訪問したことが分かる。この前年に新潟市で1府11県連合府県共進会が開催されたが、その折り仁木は漆器(蒔絵研出会席盆)を出品して5等賞を獲得している。²⁴ 伝統ある、代表的な新潟の漆器店として、仁木に白羽の矢が立ったのだろう。しかるに旅行記の記述はきわめて素気ない。(537) これは、ヴァスケーヴィチが新潟以前の地で漆器をさんざん見ており、珍しくもなかったからだろう。

市役所の助役諸星茂吉はヴァスケーヴィチに親切に対応し、必要な統計資料を提供してくれた。(537) また商業会議所でも書記長事務取扱の風間正太郎(1869-1922)が親切に対応して、必要な統計資料を提供してくれた。そしてヴァスケーヴィチの新潟滞在中絶えず彼の宿を訪れ、工場や商店を廻る際の案内役をつとめてくれた。(556, 562, 565) 風間は新潟の歴史を研究し、その成果を20冊を超える著書にまとめた在野の研究者でもある。²⁵ ヴァスケーヴィチが新潟で一番世話になった人間は風間だと思われるが、旅行記には「商業会議所書記」(556, 562)とあるのみで、その氏名が出てこないのは遺憾である。

ヴァスケーヴィチの訪問地のうち、新潟と他の地域の決定的な違いは石油産業である。彼がわざわざ新潟まで足を延ばした最大の理由はこれだろう。当時新潟市は県内の石油精製地ベストスリーのひとつだった。ヴァスケーヴィチは倉田久三郎の石油精製所を見学した。

「新潟市から5キロほど離れた、信濃川のほぼ岸沿いにある倉田久三郎の工場は、新潟市の大企業のひとつである。その所有者はまだ若い人で、出身は奈良で、彼の父親はその地の大木材業者だった。石油産業に投資すればいかに莫大な収益が得られるかを偶然知って、倉田氏は自分の父親の職業を放棄し、石油産業に移っ

た。彼が新潟に移り住んだのは1886年のことで、それはちょうど新潟県で石油産業が勃興し始めたと考えられる年である。工場建設に約4万円を費やしたが、彼は最初の10年間で投資した資金を回収してあまりあった。しかしながら、同じような企業の数が増えて競争が激しくなったため、石油産業はここ数年間それほど莫大な利益をもたらしてはいない。倉田氏の工場は毎年最高5万石の石油を精製する。」(562-563)

倉田は1887年頃から県内各地で石油採掘を始めた。その後精製・販売業に転じて、「日本石油」の原油を精製し、また同社の精製灯油を買い入れて日本全国の油業者を訪問。越後油の効果を説いて、外国の灯油の販路に割り込みを試みた。この頃は県内第3位の製油業者となり、宝田石油株式会社の取締役をつとめていた。²⁶

風間正太郎はヴァスケーヴィチを「イタリア軒」に案内した。これは、もとフランス曲馬団の調理師、イタリア人のピエトロ・ミリオールが1881年につくった高級レストランで、新潟の西洋料理店の先駆けとなった店である。²⁷

「洋風レストラン『イタリア軒』で昼食をとった時、私は地元産の赤ワインを1本飲み干す機会があった。私の同行者の商業会議所書記は、特にこのワインを私に勧め、その際、今年初めに皇太子が新潟市を訪問した折り、殿下はこのワインを試飲され、お誉めあそばしたという話をしてくれた。おまけに皇太子はワインを10本旅行に持参された。このワインは『Champion』という商標で知られ、新潟市周辺の川上氏のブドウ園で製造されている。川上氏はブドウ酒の醸造を学ぶため、わざわざフランスへ出かけた。ワインは彼によって2年かけてつくられ、かなり大量に販売されている。もっともワインの味は、ヨーロッパ人の好みに合うだろうとは言えない。ワインは酸味と渋味がつよすぎる。」(565)

引用中の「川上氏」とは川上善兵衛(1868-1944)のことである。川上は頸城郡北方村(現上越市)に「岩の原ぶどう園」を開いて、ぶどうの栽培と品種改良に努力し、ワイン造りを研究した人物である。²⁸

ヴァスケーヴィチは県庁でも資料収集をした。

「今日私は県庁で資料を収集した。インテリの日本人が外国人に対する場合の魅力的な親切さと心遣いに、私はなお一層尊敬の念を厚くする。県知事と内務部長は、私のこれまでのすべての訪問地同様、心から歓待してくれた。彼らはこれまでの県庁と同じように注意深く私の話を最後まで聞き、その後県知事は私に必要な資料を渡すべく適切な指示を出してくれた。」(566)

当時の県知事は、第10代の柏田盛文である。実際にヴァスケーヴィチの相手をしたのは、内務部長の田中坤六書記官と石澤兵吾第四課長だった。石澤は新潟県物産陳列館の館長をもつとめていたので、この後ヴァスケーヴィチをそこへ案内した。²⁹

倉田久三郎がヴァスケーヴィチのために一席設けた宴席の場面は、新潟の章の白眉をなしている。

「私が視察した石油精製工場主の倉田久三郎氏が、夜に郊外の最高の料亭のひとつに私を招待してくれた。夕食には他に何人かの当地の豪商たちも招かれた。正式の晩餐はもちろん芸者ぬきというわけにはいかず、私はその美しさで日本じゅうに知られている、当地の芸者と近づきになることができた。美と踊りと唄と音楽とさらには嬌態のプリマドンナ、計8人の芸者が呼ばれた。その一人一人がそれなりに魅力的だった。私が一番強い印象を受けたのは、美の体現者と嬌態の体現者だった。前者はもっとも厳格な美の鑑定者が見ても文句なく理想的な美人と見なしたろうし、後者はいかなるフランス女性にもひけをとらなかつた。芸者たちは皆とても礼儀正しく、かわいらしくふるまったので、私は彼女らにぞっこん参ってしまった。居合わせた客人たちも控えめにふるまい、何よりもヨーロッパ人の風習について私にあれこれ質問した。」(566)

「郊外の最高の料亭のひとつ」とは、行形亭のことか。行形亭は1850年代から今日まで続いている料亭で、明治時代には鍋茶屋とともに新潟市の料亭の双壁と称された。³⁰ ヴァスケーヴィチが芸妓の接待を受けるのはこれが初めてではなく、敦賀、福井、三国、金沢と場数を踏んでいるのだが、やはり古町芸妓の魅力は格別だったのだろう。古町芸妓は新潟市古町周辺で働いている芸妓のことで、発祥は18世紀末にさかのぼり、色白で美人、優れた芸で知られていた。³¹ 倉田はこの翌年2月から9月まで、アメリカ、カナダ、ロシアの石油事業の視察に出かけている。³² 彼がヴァスケーヴィチをこれほど親切に接待したのは、あるいはこの半年後にひかえた旅行を念頭に置いてのことかもしれない。それにしてもイタリア軒での昼食といい、行形亭と思しき料亭での夕食と芸妓の接待といい、いずれも当地の庶民にとっては手の届かぬ高嶺の花で、ヴァスケーヴィチは新潟で最高のもてなしを受けたとわかっていい。

旅行記の新潟の個所ではとりわけ統計表が目立つことも指摘しておく。

2. 新潟側の反響 1896年に日本政府は新潟・ウラヂヴォストーク間に政府助成の郵便定期航路を開設した。だがこの航路はわずかに年4回のうえ、函館、小樽、

コルサコフと寄港地が多く、航行も緩慢だったのであまり利用がなかつた。その結果1902年から出港地が敦賀に移されて、新潟は単なる寄港地となってしまったのである。その直後にヴァスケーヴィチが新潟を訪問したことになる。彼の旅行記を一読すれば、敦賀や金沢に比べて新潟の対岸交流の熱気のなさが顕著だが、これは以上の事情に起因している。³³

1902年8月27日の『東北日報』に、ヴァスケーヴィチの来訪に関する次のような記事が載った。

「[前略] 今日では日本語を自在に使ふことが出来、且つ頗る如才なき男ださうで、年齢もまだ若いとの事だ、兎に角一癖あるらしき人物であつたさうだ [中略] ◎吾人は此のワスケイバの渡来に就て、窃かに聞知する所あるも、少しく憚る所あつて、今は明言するを見合はすも、他日必らず世上の話を上る時あるべきを信じて居る、唯だ諸新聞に四号活字以上の標題を見なかつたのが意外であつた◎其後何故かは知らざれども、憲兵が出張してワスケイバが視察した跡に就て、詳細なる取調を為したとの事である [後略]」

「頗る如才なき男」、「一癖あるらしき人物」という印象は、旅行記読了後の筆者の印象と同じである。「吾人は此のワスケイバの渡来に就て、窃かに聞知する所あるも、少しく憚る所あつて、今は明言するを見合はす」というくだりは、何を示唆しているのかは不明である。

5. 旅行と『旅行日誌』の意義

1. 日露戦争との関わり ヴァスケーヴィチが日本を訪問したのは、日英同盟調印の4カ月後、そして日露戦争勃発の1年半前にあたる。当然のことながら、彼の旅行は日本人からこのような文脈で見られた。訪問先の日本人たちとの会話で日英同盟や日露戦争の可能性が話題に上り、時には露骨に敵扱いされるケースもあった。(83-84, 101-102, 144, 276, 292, 362) また福井、小松、金沢ではスパイの嫌疑をかけられ、彼は大いに憤慨している。(112-113, 137, 212, 371-372) なるほどヴァスケーヴィチの旅行記には戦争や日本の学校の軍事教練、軍隊、軍人の言及があるが、それは断片的なもので、狭義の諜報活動としての体をなしていない。「学生派遣の目的は、訪問すべき国とその言語、地方の風俗、習慣と経済状況を詳しく知ること」(300)と本人が定義づけているように、彼の旅は北陸地方の商工業の実状調査と資料収集を第一の目的としていたのである。

2. ヴァスケーヴィチが得たもの この旅行でヴァ

スケーヴィチの日本語の語学力がさらに錬磨されたことは間違いない。その成果は、1903年5月に卒業後、通訳として従軍した日露戦争で生かされることになる。また1907-1909年に駐京城ロシア総領事館の実習通訳をつとめ、1909年に駐日ロシア大使館の臨時通訳、さらに1911年から1917年まで同館の通訳をつとめた。³⁴ またこの旅行を端緒として、ヴァスケーヴィチは日本学者として著書『沿アムール地方の日本人の生活習慣概論』(1905)、論文「沿アムール地方の日本人の生活習慣研究のための資料」(1905)、「日本・朝鮮関係概論」(1909)、「日本の学校」(1912)などの業績を残すこととなる。³⁵

ヴァスケーヴィチが旅行で得たものは、これだけではあるまい。彼は北陸地方の市井の民とじかに接触し、その暖かい心遣い、実直さに触れることができた。ヴァスケーヴィチは古き伝統を守る日本人に、とりわけ好意を示している。(119, 213) この体験が、後述の彼の後半生の人生行路の選択に影響を及ぼしたのではないだろうか。

3. すさまじい情報・資料収集能力 ヴァスケーヴィチの『旅行日誌』を一読するや、彼のすさまじいまでの情報・資料収集能力に圧倒される。伏木市役所で冷淡な対応を受けると、彼は他の訪問地の市役所の親切なサービスぶりを並べ立て、ついでに富山県知事に訴え出ると脅し文句まで並べて目的を達した。(409) また富山商業会議所で所長の不在を理由に資料提供を断られた時は、ただちに所長の自宅を訪問してその許可を得ている。(498) そもそも東洋学院の学生は、旅行前年の12月に原語で書かれた訪問予定地の名所旧跡案内書を渡され、それを逐語訳して旅行に備える、というシステムになっていた。³⁶

このような旅行記を大学3年生が独力でまとめたことに驚嘆せざるをえない。逆に日本の、例えば新潟商業学校の生徒も日露戦争後の1910年に修学旅行でウラヂヴォストークを訪れているが、これは数日間の、しかも団体旅行にすぎず、うち一生徒が旅行記を残しているが、これまた簡略なもので、ヴァスケーヴィチの旅行と旅行記の壮大さにはとうてい比肩しえない。³⁷ 1907年には新潟県の視察団がウラヂヴォストークとサハリンを訪問して、小林^{なごろう}存が『新潟新聞』に「^{ほろていにちじょう}鵬程日乗」を、また「夢介」が『東北日報』に「日本海巡航記」、「浦港視察記」、「樺太雑観」を順次連載した。³⁸ さらに小林と風間が『浦潮斯徳及樺太視察報告』(新潟商業会議所、1907年)をまとめた。いずれも貴重な情報を含んでいるが、ヴァスケーヴィチのものと比較すれば、質量ともに差は歴然としている。

従って、『東洋学院紀要』に連載されたヴァスケーヴィチの旅行記が、学院教授会できわめて高い評価を受け、単行本として出版されたのも当然である。1902年10月30日の教授会の議事録には、もっとも優れた旅行報告の一つとして最初に彼の旅行記が挙げられ、2頁半にわたってその講評がなされている。そしてヴァスケーヴィチはもう一人の聴講生とともに金メダルを授与された。³⁹

4. 今日の日本にとっての意義 今日の日本にとって本旅行記は、北陸地方の郷土史研究の一級史料といえる。そこには北陸各地の実にさまざまな分野の統計資料が数多く収められている。さらに父子で営む明治時代の零細な家内工業の姿や労働者の劣悪な労働条件、とりわけ悪条件下の廉価な女性労働の実体と、女性の低い地位が浮き彫りにされている。

またこの旅行記は、現在の日本の日本海側地域とロシア極東、サハリンとの交流を維持、促進する上で大いなる示唆を含んでいるように思われる。とりわけ、前述の、対岸交流に沸く日本人たちをシビアーに見つめるヴァスケーヴィチの視線のなかに、今日の我々がくみ取るべきものが少なからずあるだろう。

おわりに

日本の実状と日本人の実体をこれほど詳細かつ鮮明に描き出したルポルタージュを、ロシア帝国は日露戦争で有効に生かすことはできなかった。その後の日本研究においてもしかりである。筆者の知る限り、ソ連時代の出版物でヴァスケーヴィチの名前に言及しているのは、前掲のZ. N. マトヴェーエフ、A. D. ポポフの『日本書誌』とロシア科学アカデミーの『日本書誌』のみである。また近年出版された『19世紀中葉から1917年までの祖国の東洋学の歴史』でも、ヴァスケーヴィチについては不十分かつ不正確な記述しか見られない。⁴⁰ その理由として少なくとも2点挙げることができよう。

まず第1点は、東洋学院がその後歩んだ悲惨な道りである。東洋学院は第一次ロシア革命のさなか、教授会と学生自治会の対立から一時すべての教育活動を停止する事態に陥った。1920年に極東国立総合大学に改組されるが、この改組はソビエト政府によって実施された訳ではない。スターリンの粛清が頂点に達した1937年には、本大学日本語学科の教官と出身者が日本のスパイの嫌疑をかけられて一斉に逮捕され、1939年には大学そのものが閉鎖されてしまった。これによって東洋学院時代と極東国立総合大学初期の研

ロシア人の観た明治の新潟

究の蓄積が、ほとんど根絶やしにされてしまったのである。大学が再興されるのは1956年のことである。⁴¹

第2点は、ヴァスケーヴィチの後半生に関わる問題である。彼はロシア革命後も1925年まで大連のロシア総領事館の領事、次いで総領事として勤務した。1925年以降は大連近郊の営城子に農場を買い、農業や酪農に従事した。1938年頃にヴァスケーヴィチは大連近辺の海沿いの保養地、夏家河子に移り、次いで日本に移住して、神戸近郊の鈴蘭台に土地を買って家を建てた。これには、鈴蘭台に住んでいた東京勤務時代の同僚V.A. スコロドゥーモフの寡婦の説得が与って大きかったようだ。ヴァスケーヴィチの妻と娘は来日前に亡くなっていた。1942年に彼は東京で困窮していた元駐日ロシア大使館代理大使D.I. アプリコーソフを呼び寄せて、自宅に同居させた。第二次世界大戦中にはスパイ容疑で警察に逮捕、尋問されたこともあった。1946年にアプリコーソフがアメリカへ去ったため、ヴァスケーヴィチは再び独り暮らしになった。他に交際した白系ロシア人としては、「コスモポリタン製菓」のF.モロゾフがおり、この人物からは金銭的援助を受けていたようだ。⁴² そして1958年3月29日にヴァスケーヴィチは敗血症のため神戸で死亡し、同地の外国人墓地に葬られた。⁴³ このような亡命者としての後半生が、ソ連邦の日本研究において彼の業績が無視される最大の原因となったのである。

(さわだ かずひこ・埼玉大学)

本稿執筆に際し、チェコ共和国スラブ図書館、ハワイ大学ハミルトン図書館、石川県立図書館、外務省外交史料館、国立国会図書館、東京大学法学部附属近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）、富山県立図書館、新潟県立図書館、新潟県立文書館、一橋大学図書館、丸屋本店、早稲田大学商学部教員図書室、早稲田大学中央図書館、埼玉大学図書館で資料を収集した。またA.A.ヒサムトザーノフ（ウラヂヴォストーク、国立極東工科大学）、田村康文（神戸市立外国人墓地）、中村喜和、橋本晴夫（新潟大学医学部図書館）、P.E.ポダルコ（大阪経済法科大学）の各氏からご教示と資料を賜った。記して感謝の意を表す。

注

¹ 日付は新暦で統一する。

² Хисамутдинов А. А. Российская эмиграция в Азиатско-Тихоокеанском регионе и Южной Америке. Библиографический словарь. Владивосток, Издательство Дальневосточного университета, 2000. С.

69; Подалко П. Э. Павел Васкевич - ученый, дипломат, путешественник: к 125-летию со дня рождения. Аста Slavica Iaponica. Т. XIX, 2002. С. 265-267.

³ この人物については、桧山真一「東洋学院（ウラヂヴォストーク）最初の日本人教師」（『ロシア語ロシア文学研究』25, 1993年, 89-92頁）を参照のこと。

⁴ Протоколы заседаний конференции Восточного института. Заседание 2 октября 1899 г. Известия Восточного института. Т. 1. 1900 г. С. III-IV. 原暉之『ウラジオストク物語』三省堂, 1998年, 218-229頁。

⁵ Протоколы заседаний конференции Восточного института. Заседание 27 апреля 1901 г. Известия Восточного института. Т. 2, вып. 3. 1901 г. С. 220, 223.

⁶ Васкевич П. Дневник поездки в Японию от порта Цуруга до порта Ниигата. Владивосток, "Дальний Восток", 1904. С. 7, 27, 34, 56, 65-66, 83, 84, 125, 143, 154, 220, 298. 本旅行記は最初『東洋学院紀要』第4-10巻（1902-1903年）に発表された。以下旅行記からの引用は、本文中の括弧内に頁数を記す。Подалко П. Э. Указ. соч. С. 269-270.

⁷ 原暉之「函館を訪れたウラジオストクの東洋学院生」、『函館日ロ交流史研究会会報』10, 1998年12月, 11頁。

⁸ Протоколы заседаний конференции Восточного института. Заседание 1 мая 1902 г. Известия Восточного института. Т. 3, вып. 5. 1902 г. С. 179-186.

⁹ Там же. С. 186.

¹⁰ 「日露郵便汽船」、『新潟新聞』, 1902年2月2日。『大阪商船株式会社沿革大要』, 発行年不明, 15頁。『大阪商船株式会社八十年史』大阪商船三井船舶株式会社, 1966年, 26頁。

¹¹ 「浦港の関税」、『東北日報』, 1902年8月31日。原暉之「対岸航路と対岸貿易——日本海を挟む日露海運の歴史から」、『ロシア研究』25, 1997年10月, 83-84頁。

¹² 十川信介・安井亮平編『二葉亭四迷全集』5, 筑摩書房, 1986年, 333頁。

¹³ 戸水寛人『東亜旅行談』有斐閣書房, 1903年, 2-11頁。

¹⁴ 田岡良一『天津事件の再評価』有斐閣, 1976年, 32, 34-35, 287頁。

¹⁵ 「正教神学校々友会名簿」、『正教時報』25-9, 1936年9月, 37頁。和田春樹『ニコライ・ラッセル 国境を越えるナロードニキ』下, 中央公論社, 1973年, 144-145, 148, 154, 157, 331頁。

¹⁶ 「東亜貿易同盟会幹事会」、『政教新聞』, 1902年7月13日, 2面。

¹⁷ 風間正太郎『新潟みやげ』精華堂, 1901年, 8-9頁。『新潟市史』上, 新潟市役所, 1934年, 931-932頁。『新潟市史 通史編3』新潟市, 1996年, 348-349頁。

¹⁸ 「東洋語学院大学生の来港」、『新潟新聞』, 1902年8月19日, 3面。

¹⁹ 風間, 前掲書, 45頁。遠藤永吉編『新潟県官民肖像録』有終社, 1908年, 38頁。山川健『新潟』新潟公友社, 1912年, 338頁。笹川勇吉『新潟わが街 柳と堀』鳥屋野出版, 1986年, 163頁。

- ²⁰ 風間, 前掲書, 13-14頁。山川, 前掲書, 328-329頁。南波松太郎『船・地図・日和山』法政大学出版局, 1984年, 683-695, 918頁。『新潟市史 通史編3』, 209-210頁。
- ²¹ 『新潟市史』上, 1086頁。笹川, 前掲書, 59頁。『新潟市史 通史編3』, 114-116, 448頁。
- ²² 風間, 前掲書, 10-11頁。『新潟市史』上, 914-917頁。『百周年記念文集 思い出の万代橋』新潟市・万代橋の百周年を考える会, 1986年, 18-19, 42-43頁。『新潟市史 通史編3』, 179-180頁。
- ²³ 『新潟市史』下, 1934年, 382-383, 862-864頁。『新潟市史 通史編3』, 163, 165, 171-172, 232-234, 257-258, 364, 369, 374, 376頁。
- ²⁴ 『新潟市史』下, 456頁。
- ²⁵ 『新潟市史』下, 448, 969頁。風間正太郎『舟江遺芳録』復刻版, 新潟雪書房, 1992年, 355-367頁。『新潟市史 通史編3』, 370, 418, 422頁。
- ²⁶ 『日本石油史』日本石油株式会社, 1917年, 111, 121, 233-234頁。『宝田二十五年史』宝田石油株式会社東京店, 1920年, 56頁。『日本石油百年史』日本石油株式会社, 1988年, 76, 82, 98頁。
- ²⁷ 岡田民雄『イタリア軒物語』(新潟日報事業社, 1974年)を参照のこと。
- ²⁸ 木島章『川上善兵衛伝』(サントリー, 1991年)を参照のこと。
- ²⁹ 前掲記事「東洋語学院大学生の来港」。
- ³⁰ 『新潟市史』下, 665-667頁。『新潟市史 通史編3』, 223頁。
- ³¹ 『新潟市史』下, 664-665頁。『新潟市史 通史編3』, 128, 132, 408頁。
- ³² 『宝田二十五年史』, 60頁。
- ³³ 「浦潮定期船の起点地変更」, 『新潟新聞』, 1902年1月20日。拙稿「新潟とロシア—1900~1945年」, 『ロシア文化と近代日本』所収, 世界思想社, 1998年, 187頁。
- ³⁴ 有賀長雄『日露陸戦国際法論』東京偕行社, 1911年, 1000-1001, 1039-1040頁。Lensen G. A. *Russian Diplomatic and Consular Officials in East Asia*. Tokyo, Sophia University, 1968, pp. 52-53; Дальневосточный государственный университет. История и современность. 1899-1999. Владивосток, Издательство Дальневосточного университета, 1999. С. 39, 568; Хисамутдинов А. А. Указ. соч. С. 69; Подалко П. Э. Указ. соч. С. 272-279.
- ³⁵ Библиография Японии. Литература, изданная в России с 1734 по 1917 г. М., “Наука”, Главная редакция восточной литературы, 1965. С. 30, 32, 236; Матвеев З. Н. и Попов А. Д. Библиография Японии. Владивосток, Типография Государственного Дальневосточного университета, 1923. С. 8, 17, 57.
- ³⁶ Дальневосточный государственный университет. История и современность. 1899-1999. С. 27.
- ³⁷ 『葦原百年史』新潟県立新潟商業高等学校, 1983年, 23頁。『新潟市史 資料編6』, 1993年, 513-518頁。
- ³⁸ 「鵬程日乗」とは「遠路日記」の意である。「夢介」は前記風間正太郎の筆名。
- ³⁹ Протоколы заседаний конференции Восточного института. Заседание 17 октября 1902 г. Известия Восточного института. Т. 5. 1903 г. С. XIX-XXI, XXVII.
- ⁴⁰ История отечественного востоковедения с середины XIX века до 1917 года. М., “Восточная литература” РАН, 1997. С. 54-55.
- ⁴¹ 原「函館を訪れたウラジオストクの東洋学院生」, 11-12頁。
- ⁴² Морозов Ф. Д. На память потомству. Кобэ. Год издания не указан. С. 94.
- ⁴³ 「大連正教会建設献金領収報告(第二回)」, 『正教時報』25-2, 1936年2月, 39頁。Lensen G. A. *Op. cit.*, p. 53; Хисамутдинов А. А. Указ. соч. С. 69; Подалко П. Э. Указ. соч. С. 279-295.

Кадзухико САВАДА**Г. Ниигата эпохи Мэйдзи глазами русского путешественника**

— По материалам «Дневника поездки в Японию от порта Цуруга до порта Ниигата» П. Г. Васкевича

С 19 мая по 1 сентября 1902 г. (по новому стилю) Павел Георгиевич (Юрьевич) Васкевич, студент 3-го курса японско-китайского отделения Восточного института во Владивостоке, совершил поездку в северо-западную часть Японии (префектуры Фукуи, Исикава, Тояма и Ниигата). Цель поездки – сбор материалов для исследования действительного положения торговли и промышленности в этом регионе. После возвращения на родину П. Васкевич опубликовал свой «Дневник поездки в Японию от порта Цуруга до порта Ниигата», который он вел во время путешествия.

В предлагаемой статье мы наиболее подробно рассматриваем главу «Дневника» о г. Ниигата: какие места и какие учреждения посетил Васкевич, с кем он встречался и кого упоминает в своих записях, сопоставляем содержание «Дневника» с местными краеведческими материалами, а также анализируем значение поездки Васкевича и его «Дневника» для Японии и России в исторической перспективе.

Содержание статьи:

0. Краткая биография Васкевича.

1. Восточный институт в г. Владивостоке: система командировки студентов за границу; успеваемость Васкевича.
2. Условия поездки: открытие регулярного морского сообщения между Владивостоком и японскими портами западного побережья; уровень знаний Васкевича по японскому языку; дорожные расходы и пр.

3. Маршрут и расписание поездки, краткий обзор «дониигатских» глав «Дневника».

4. Пребывание в г. Ниигата: сбор материалов по теме поездки. Реакция японской стороны на пребывание Васкевича в г. Ниигата по японским краеведческим источникам.

5. Значение поездки Васкевича и его «Дневника» в преддверии Русско-японской войны. Достижения Васкевича как выдающегося наблюдателя и собирателя материалов. Значение «Дневника» для современной Японии.

6. Почему «Дневник» Васкевича был забыт в советский период? Последующая трагическая судьба Восточного института. Жизнь Васкевича в эмиграции.